43. 大酒家の肝硬変症における肝シンチグラム

箕輪　孝美　　黒木　哲夫
門奈　丈之
（大阪市大・三内）
越智　宏暢　　浜田　国雄
（同・放）

大酒家の肝硬変症における肝シンチグラムの臨床的意義を明らかにする目的で，非大酒家における肝硬変症との比較検討を行なった．
対象：腹腔鏡下肝生検により組織学的に診断しえた肝硬変症 112 例 (大酒家 46 例．非大酒家 66 例)．大酒家とは HBs 抗原陰性で，1 日 3 合，10 年以上の飲酒例とした．
成績：①大酒家群では非大酒家群に比し，肝腫大型が多く，右葉萎縮型は少ない傾向を示す．②シンチグラム上肝腫大像を認める場合，非大酒家群に比し，大酒家群では肝機能異常は軽度であることが多いが，静脈瘤や腹水の頻度は高い．③肝シンチによる経過追究例では大酒家の肝硬変の末期像は，肝萎縮像を呈するとは限らず，腫大像のまま死亡する例も多い．④大酒家群では Hepatoma の合併頻度は低い．

44. 肝内門脈あるいは副行路によって肝シンチグラム上欠損像を示した 3 症例

中村　仁信　　北谷　孝嗣
（国立大阪病院・放）
原田　貢士　　吉岡　寛康
佐藤　正之　　黒田　知純
打田日出夫
（阪大・放）

肝シンチグラムにおいて，space occupying lesion 以外の，false positive の欠損像を呈するものとして，さまざまな原因が挙げられるが，肝内門脈による欠損は成書に記載されておらず，文献的にも 1975 年 Shanser ら，1976 年斎藤らの報告をみるのみである．われわれは最近 2 年間に門脈が原因であることを血管造影で証明した 3 例を経験したので報告する．

1 例目は 54 歳女性で，肝硬変があり，肝シンチグラムで，両葉萎縮，脾腫，骨髄像の他に，肝門部に欠損像が疑われた．上腸間膜動脈造影の静脈相で肝門部に拡張した門脈がみられ，シンチグラムの欠損像と一致した．

2 例目は 22 歳の男性で，肝シンチグラムで肝門部から末梢に向かって消失していく欠損像があり，血管造影で肝門部に拡張，蛇行した collateral vein が多数みられ，本来の門脈は閉塞していると思われ，collateral による欠損像と診断した．

3 例目は 61 歳女性で，肝シンチグラムで両葉の腫大と，正中部に肝門部から上方へ走り，屈曲して左方へ走る細長い欠損像があり，門脈左枝によるものであることが，血管造影で確認された．
1 例目はこれまでの報告と同様に肝硬変による門脈拡張が原因であるが，2 例目の門脈血栓症に伴う collateral が原因となった報告は皆無である．
3 例目は正中部の肝実質の韮薄化に原因があるが，きわめて明瞭に門脈の走行が捉えられていた．

45. 肝シンチグラムで defect を呈した原発性アミロイドーシスの一症例

柏木　　徹　　西村　恒彦
木村　和文
（阪大・中放）
中川　彰史　　鎌田　武信
阿部　　裕
（一内）

アミロイドーシスは，糖蛋白を主成分とするアミロイドが全身諸臓器に沈着するび慢性疾患と考えられている．このようなび慢性疾患であるにもかかわらずアミロイドーシスの肝シンチグラムで focal defect を呈する場合があることが報告されており，われわれも同様の症例を経験したので報告する．

症例は 74 歳の女性で，黄疸を主訴として入院した．^{99m}Tc phytate 3 nCi による肝シンチグラム

Presented by Medical*Online